

## 1.女性とスポーツの歴史

紀元前、女性は試合を観戦することさえ、許されていませんでした。これまで女性は、競技へ参加する権利を得るために闘ってきました。第33回パリオリンピックにてほぼ男女同数の選手が参加するまでの道のりは大変長いものでした。

主な出来事を取り上げます。

紀元前 776 年頃	第1回古代オリンピックに女性は参加も観戦もできなかった
1896 年	第1回近代オリンピックがアテネで開催されたが、女性は競技への参加は禁止された
1900 年	第2回パリオリンピックで、女性の競技への参加が初めて許可された 女性 22 名/全体 997 名中
1928 年	第9回アムステルダムオリンピックで、日本人女性では人見絹枝選手（陸上競技）が初めて参加し、女子 800 メートルで銀メダルを獲得した
1936 年	第11回ベルリンオリンピックで、前畑秀子が平泳ぎ 200mで日本人女性初の金メダルを獲得した
1966 年	ボビー・ギブはボストンマラソンを男装して走り、大会初の女性ランナーになった
1972 年	アメリカであらゆる性別の教育機会均等を定める教育改正法 9 編が可決され、スポーツを含む学校教育活動における性差別は違法となった
1978 年	ユネスコは、スポーツが「すべての人が持つ基本的権利」であると宣言した
1991 年	FIFA がサッカーの女子ワールドカップを初めて開催した
1996 年	アメリカで女子プロバスケットリーグ WNBA が立ち上げられた
2021 年	第32回東京オリンピックで、女性選手が 49%と半数に近づいた
2024 年	第33回パリオリンピックで、選手はほぼ男女同数となった

女性たちは現在もなお、スポーツにおけるあらゆる面での男女格差をなくすために、闘い続けています。

## 2.スポーツにおける男女格差

ここではサッカーWF(ワールドカップ)やプロスポーツにおける男女格差の現状を、みていきます。



前述のように、2023年サッカー女子W杯(ワールドカップ)の賞金は大幅に増額されました。この年のサッカー女子W杯から、日本代表女子の待遇も、移動の飛行機がチャーター機、専属シェフも同行する等、男子との差がなくなりました。

日本では、2021年から「WEリーグ」という、女子プロサッカーリーグが始まりました。規約では最低年棒270万円の選手を1チームにつき15人以上とすることが条件になっていますが、1億円プレーヤーが複数いる男子のJ1リーグと比べると、まだかなりの格差があります。しかしWEリーグができたことで、サッカーに専念できる女子選手が多くなりました。

テニスでは2007年から四大大会(全豪・全仏・全英・全米)において男女の賞金総額が同額になりました。しかし、各ツアー大会ではまだ男女格差が大きく、2023年に男女共催されたワシントン大会では女子優勝賞金は男子の3分の1でした。WTA(女子テニス協会)では、トップイベントにおいて2033年までに男女同額賞金の実現を目指しています。



バスケットボールでは、アメリカの大学バスケットボールで男女通じて最多得点記録を更新したケイトリン・クラーク選手のWNBA(女子プロバスケットリーグ)1年目の年棒が7万6535ドル(約1180万円)であり、NBA(男子プロバスケットリーグ)の最低年棒の1割にも満たないというニュースが2024年4月にありました。

賞金や年棒等や待遇等の他にもプロスポーツにおける様々な面での男女格差をなくすためには、選手自らが声をあげることも必要ですが、協会や団体の役員に女性の割合を増やすことも重要ではないでしょうか。

ワールドカップや四大大会等世界中で注目される大会や、人目につきやすいプロスポーツにおいて、男女格差が是正されていくことが、人々の意識改革につながり、スポーツのみならず社会全体のジェンダー平等化につながっていくといえるかもしれません。

## 3.女性とスポーツを取り巻く課題

現在、女性とスポーツを取り巻く課題としては、児童生徒の運動する子・しない子の二極化と働く世代の女性のスポーツ実施率の低さなどがあげられます。また、障がいのある人のスポーツ実施率は障がいのない人に比べてさらに低いという結果も出ています。(令和5年度全国体力・運動能力・運動習慣等調査、令和3年度スポーツの実施状況に関する世論調査、令和3年度障害児・者のスポーツ調査)

スポーツに取り組む女性の健康についても留意する必要があります。とりわけ、競技性の高いスポーツを行う女性は、エネルギー不足に起因する貧血や無月経、疲労骨折などのリスクが高くなります。過度なトレーニング・食事制限等によって健康被害に繋がる場合があるため、本人のみならず、指導者などへの正しい知識の普及・啓発や理解促進が重要です。

そして、月経、妊娠・出産、更年期等、それぞれのライフステージで特有の健康課題があります。こうしたものの中には、適度な運動週間を身に付けることで予防できるものもあり、生涯にわたっていきいきと過ごすために、運動・スポーツを日常生活に取り入れていくことが期待されます。



多様な性とスポーツ  
多くの競技スポーツは男女で明確に分かれていますが、その体制がLGBTQの人のスポーツをする機会を奪っているとも言えます。LGBTQであることでスポーツへのアクセスが阻害されている現状を認識し、問題に向き合う必要があります。



## 4.生涯スポーツ

全国の20代から60代の男女1000人を対象の「スポーツに関する調査」によると、定期的に運動またはスポーツをしていない人が約半数でした。スポーツをする理由のトップ3は「健康維持」、「体力維持」、「ダイエット」の順で、スポーツの種類は右表のとおりです。

競技スポーツには勝ち負けがあり、上達することや目標を達成することを目的としていますが、生涯スポーツは健康増進や仲間との交流を大切にしています。スポーツで体を動かし、楽しみながら健康になり、スポーツを通して仲間を作り、爽快感や達成感などの精神的楽しさも得ることができます。自分の体を動かし、鍛え、楽しむことは、トップアスリートだけに限らず、誰にとっても大切な人生の一部であるはずで、それは「自分の身体は自分のもの」という感覚を育み、毎日を元気に生きる糧となります。

また、スポーツは「する」だけでなく、テレビや試合会場で観戦することや、大会の審判やボランティア等でスポーツに関わることもスポーツの楽しみや喜びです。全年齢の人それぞれのライフスタイル、体力などに合わせ、生涯を通して、「する」「みる」「ささえる」という様々な立場から楽しくスポーツに関わっていきませんか。



【参考文献・参照ホームページ】  
楽天インサイト <https://insight.rakuten.co.jp/report/20200313/>  
スポーツ庁 これからの女性スポーツについて考えよう～全ての人がスポーツにアクセスできる社会の実現に向けて～  
【前編】<https://sports.go.jp/tag/women/post-120.html> 【後編】<https://sports.go.jp/tag/women/post-121.html>  
大人になったらなりたいたいもの調査結果 [https://www.dai-ichi-life.co.jp/company/news/pdf/2023\\_066.pdf](https://www.dai-ichi-life.co.jp/company/news/pdf/2023_066.pdf)  
サッカーW杯賞金 <https://jp.reuters.com/article/idUSKBN2VJ04C/>  
月刊誌アイユ7月号(2024年7月15日)公益財団法人人権教育啓発推進センター  
レイチェル・イグノトフスキー(2019)「歴史を変えた50人の女性アスリートたち」創元社  
会社四季報「ワールドカップでも奮闘する女子サッカー選手のお金事情」<https://shikiho.toyokeizai.net/news/0/689365>  
毎日新聞「スポーツ界の男女格差 平等な競技環境整えたい」<https://mainichi.jp/articles/20230807/ddm/005/070/017000c>  
JFA 女子委員会「women empowerment report 2023」[https://www.jfa.jp/women/pdf/women\\_empowerment\\_report\\_2023.pdf](https://www.jfa.jp/women/pdf/women_empowerment_report_2023.pdf)  
日本経済新聞「全米テニス、高額優勝賞金 男女同額へ奮闘の歴史」<https://www.nikkei.com/article/DGXMZ091073180Y5A820C1000000/>  
毎日新聞「格差が波紋 国民的スターでも女子は年棒1200万円 男子の1割未満」<https://mainichi.jp/articles/20240418/k00/00m/050/050000c>  
朝日新聞デジタル「8年前にカナダで入れなかった特別な風呂 変わる女子サッカーの環境」<https://www.asahi.com/articles/ASR7F4WNL79UTQP00B.html>